演題番号：A6

羊からの感染による悪性カタル熱を発症した搾乳牛の1症例

○伊達偉乃里，中村善彦，勝田りさ子，黒岩武信，笹倉春美，是枝明博，泉　弘樹，菅　保礼

NOSAI ひょうご　阪神家畜診療所

1. はじめに：悪性カタル熱（malignant catarrhal fever; MCF）は，ヘルペスウイルス感染による発熱，呼吸器・消化器粘膜の重篤なカタル炎，角結膜炎，脳炎等を特徴とする牛や鹿などが罹患する届出伝染病である。今回，同一牛舎内に羊を飼養する乳肉複合経営農家でホルスタイン種搾乳牛１頭において，MCFを疑う症例が発生した。発症牛および羊から羊ヘルペスウイルス２型が検出され，MCFと診断した。

2. 材料および方法：症例は対尻式タイストールの搾乳牛舎にて飼養されている 2020 年 1 月 18 日生まれのホルスタイン種搾乳牛で，羊２頭が頭側 1m に繋留されており，発症牛との接触が可能であった。また，肥育牛は別の牛舎で飼養されていた。2023 年 5 月 22 日食欲不振で求診。体温 40.8℃，活力減退，食欲不振，肺音粗励，眼粘膜充血の症状を認め，抗生物質を投与するも，発熱が続き，第 4 病日には，体温 41.0℃，鼻鏡・口腔粘膜の糜爛・潰瘍，膿性鼻汁，流涎，眼結膜角膜の混濁を認めた。羊と同居していることからMCFを疑い姫路家畜保健衛生所に病性鑑定を依頼し，羊２頭を隔離した。第 5 病日，発症牛の鼻腔・口腔スワブ，鼻腔剥離粘膜，血液，発症牛に接する両隣の牛の血液，および同一牛舎内にて飼養していた羊２頭の血液を用いて病性鑑定を実施した。同日発症牛は死亡した。2023 年 6 月 6 日，同居牛全 37 頭の血液を用いてPCR検査を実施した。

3. 結　果：発症牛の検体すべておよび羊２頭の血液から羊ヘルペスウイルス２型が検出された。両隣の牛からは検出されなかった。また，同居牛全 37 頭はすべて陰性であった。羊２頭の隔離後は新たな発症を認めなかった。

4. 考察および結語：症例は日本で発生したMCFにおいて牛では 13 頭目，本県では初めての報告となる。MCFは牛や鹿が終宿主で，発症した動物が感染源になることは稀とされており，本症例は自然宿主である羊が保持していた羊ヘルペスウイルス２型の感染によるMCFにより死亡したと考えられる。本疾病の潜伏期間は数週間から数ヶ月と言われているが，同居牛はすべて陰性で肥育牛での発症がないことから羊と接触した個体のみが発症したと推測された。本疾病は発症した際の致死率は非常に高いものの，牛と羊を分けて飼養することで発生を予防できるため，本疾病の発症リスクについて周知していく必要がある。